

心象から表現へ——心象と場、構文——

河原 修一

はじめに

ものごと（ひとを含む）との関わりによって、おもいがうまれ、様々なかたち（表象）となる。自分にとってこころにあらわれるかたち（心象）があり、他者に対してあらわれるかたち（声、表情、身振り、手振り、音、図像、言動）がある。意識的または無意識的な表象が具体的なかたちとなって、自分にも他者にも知覚されるとき、表現（身のことへの表象）となる。

一、心象と意味

意味はものごと（ひとを含む）の関係づけであり、文法はことばによる関係づけかたである。

意味は、ことばにならない（ことばになる前の）^{〔注1〕}こころのなかのかすかなおもいから始まる。ものごとは心象（こころのなかの様々なすがた・かたち・かた・かげ）としてたちあらわれる。

心象は個物をとらえ、自他未分の意識では混同心性（主客一体的心象）となり、^{〔注2〕}自己意識では複合（生活経験的心象）となる。自己意識では個人心情的経験から観念（反復定型的心象）となり、社会的意識では社会的合意が参照されて概念（抽象分類的心象）となる。超自己意識（無我意識）では経験を越えた普遍観念（直観的心象）となる。

ひと（自分）はひと（他者）と関わり合いながら成長し経験していくなかで、様々な心象を関係づけ、それぞれの意味を獲得していく。ことばと出会うことにより、場に応じた象徴的なはたらきや、様々な場を通じた記号的なはたらきを体得していく。ものごとの具体的なありかたの目印としての固有名、ものごとの（社会的に合意された）基本的なありかたとしての概念ということばの意味を獲得し、記号的な意味の組合せによって（記号的な意味の組合せかたという文法を体得することによって）、様々な現象（ものごとのうごきやさま）を表象し（かたちにあらわし）、ひと（他者）とおもいを通わせ合うようになる。

ひと（主体としての自分）は身体でものごとくを感受する。感覚があり、印象がある。身体は神経系という情報系（通信系）によって、ところとつながっている。感情を呼び起こし、記憶と照合されて知覚となり、思考をもたらし、想像と直観をはたかせ、自分とものごとを関係づけ（自分をめぐる状況を認識し）、言語活動を含む行動（言動）となる（行動しないこともある）。

言語は、共同体の約束によるしるし（記号）の体系である。場（脈絡、状況）に応じて、人々に使用されることで形成され、更新される。言語には、場に応じた様々な基準による対立関係から成る枠組がある。それぞれ枠組としての傾向がある。場を踏まえることで、概ね意味のやりとり（通信）ができる。

個人の意識に内在する枠組としての言語は、社会的な約束に基づく記号体系として、その時点で普遍性をもち、見えないもの（聞えないもの）であるが、弾力的な鋳型のように、様々な言語表象を生成する。言語表象には、内的言語表象（以下、「内言」と略す）と外的言語表象（以下、「外言」と略す）すなわち言語表現とがある。内言はこころのなかのことであり、外言は身のそとのことは（話しことば、書きことば）である。

言語は抽象的であるが、言語表象は具体的な場、脈絡（時間的な前後関係など）、自他をめぐる状況（以下、「場」または「脈絡」と総称する）のなかにある。

ものごと（自分、他者を含む）の関係づけ（意味）への問いから、主體的な意味（自分にとつての関係づけ）が生成される。そのときのおもい（感情、思考）による心象の形象（心象群のまとまり）が

言語心象（構成的聴覚心象）に（神経系を通して）写像的に変換されて、（記憶された言語記号体系に基づき）言語記号への変換および言語記号群の連合または連結による言語表象となる。言語で表象しきれないものごとは、言語以外の図像などで表象されるか、言語記号群の象徴的な組合せ（暗示、レトリック、詩的象徴）で表象される。言語記号群は音声、文字、手の動きなどで表現される。

意味のやりとりは、言語によるやりとりと場（脈絡、状況）に基づく言語以外の要素のやりとりによる。会話では、言語表示における（外在的な）脈絡とともに、話し手と聞き手を含む広義の場がある。後者には、（内在的な）心理的脈絡、（外在的、内在的な）場面的脈絡、（内在的な）文化的脈絡があり、文化的脈絡として言語という記号体系、言語文化がある。^{注3}

内言、独言、文章は心理的脈絡と関連し、談話は心理的脈絡および場面的脈絡と関連し、いずれも無意識に文化的脈絡と関連する。場を含む広義の文法は、ものごと（ひと、こころを含む）の関係づけかたである。場を含む文法として、心象文法がある。

二、場を含む文法

言語による意思の伝達（以下、「言語伝達」と略す）は、言語表現に含まれる。言語表現は独言や日記もありうるが、言語伝達では、言語主体として、表現者だけでなく受容者を必要とするから、表現者は伝達者でもある。言語表現における素材は、言語伝達における情報でもある。情報には、言語表示による情報と、言語表示とともに

にある場による情報とがある。

談話における言語伝達（会話）を例として、ことばと場の関係を簡略に図示する。

心象（意味）↓言語心象《ユレテイル》↑言語の枠組

話し手 （車の通過／迷惑）←「心情、性格、気分、体調

←「ことば」「揺れてる」一話し手と聞き手の関係

情報一 年齢、性別、身分、知識、経験

←「ことばとともにある場」上時、所、出来事、事物、経緯

聞き手 （地震／不安）

心象（意味）一服装、態度

「文化背景（社会情勢、時代感覚、

← 民族性、地域性、言語文化）

↑言語心象《ユレテイル》↑言語の枠組

会話では、場の関与が大きく、言語表示における脈絡と場の脈絡とが協働して、意味のやりとりが成り立つから、言語表示が論理的とは限らない。ただし、言語表示を支える言語の枠組は、様々な形式が複合しながらも緩やかな整合性を備えている。したがって、言語表現の意味（ことばに示されたものごとの関係づけ）は、場を含む文法（ものごとの関係づけかた）に支えられている。

場を含む文法について、簡略に図示する。

話し手 心象↓意味↓言語心象↑言語の枠組（論理脈絡）／場

← 場（↑象徴（暗示、修辭、詩的象徴）↓待遇）↓発話

聞き手 言語表示（↑象徴・待遇）／場↓意味のよみとり↓心象

以下、例を示す。

（例1）「揺れてる」（同じ部屋にいて、振動を感じるとき）

話し手 振動心象↓車の通過↓迷惑・《ユレテイル》↑騒音経験

眉根を顰める表情、身振り手振り、発話「揺れてる」

聞き手 振動心象↓地震↓不安・《ユレテイル》↑震災経験

話し手の表情、身振り手振り、発話の意味↓誤解

話し手の発話は、（また大型トラックが道路を通過して、部屋全体が揺れている。迷惑だね）という論理脈絡のうち、傍線部以外は場の要素で示されている。聞き手の理解は、（また地震が起きた。ずつと揺れている。不安でたまらない）という論理脈絡のうち、傍線部以外は場の要素で示されている。場の要素の違い（場のよみとりの違い）によって、誤解が生じることもある。

（例2）「いいよ」（相手の誘いかけに対する返事）

①共感的同意（↑上機嫌↑親密な関係の持続）

やわらかい声（上昇調）、ほほえみ、両掌上向き、頷き

②反感的拒絶（↑不機嫌↑関係の齟齬）

とげとげしい声（下降調）、眉根吊上げ、両掌突出し、顔背け

話し手と聞き手の心理的関係の経緯という内在的な心理的脈絡、声の調子（音調を含む）、表情、身振り手振りなどの外在的な場面的脈絡に依りて、共感的同意にも反感的拒絶にもなる。①は、「よい考えたから、大賛成だよ」という論理脈絡のうち、傍線部以外は場の要素で示されている。②は、「よい考えたが、賛成できかねるよ」という論理脈絡のうち、傍線部以外は場の要素で示され、（定着農耕を主な生計手段としてきた）協調性を重んじる日本人の民族性という集合的無意識としての文化的脈絡が背景にある。

（例3）「海だ」（山中を歩き続けていて、突然海岸に出たとき）

- ①喜びを伴う感動↓弾んだ声（上昇調）、笑い、両掌突上げ
②落胆を伴う詠嘆↓落ち込んだ声（下降調）、洪面、両掌垂し

それまでの心理的脈絡（経緯）、声の調子、表情、身振り手振りなどの場面的脈絡に依りて、喜びを伴う感動を示したり、落胆を伴う詠嘆を示したりする。①は、「海がある」（海が青い）（海がきらめいている）（海は広い）（海はすばらしい）などの論理脈絡では（海）の心象を分析できないままに、（海）という素材を載りとして（だ）で（プラス評価で）想いを凝縮させている。発話者が女性なら、「海よ」「海ね」と（よ）（ね）などで想いを凝縮させる。②は、「海がある。海が波立っている。これから前に進めない。困った。どうしよう。」という論理脈絡では（海）の心象を分析できないままに、（海）という素材を載りとして（だ）で（マイナス評価で）想いを凝縮させて

いる。

（例4）「まだだ」（取引先との面会に向かう列車のなかで、

「大阪駅はまだか」と同乗者に訊かれたときの返事）

焦慮↓話し手、聞き手の苛立った表情（↑取引先との関係、経緯）

話し手の発話は、「大阪駅にはまだ着かない。待ち合わせの時刻に遅れてはいけないから、私だつて焦っている」という論理脈絡のうち、傍線部以外は場の要素で示されている。（まだ）という素材を載りとして（だ）で（マイナス評価で）想いを凝縮させている。

（例5）「明日から夏休みだ」（学童達の会話）

喜びを伴う感動↓弾んだ声（上昇調）、笑い、両掌突上げ

「明日から夏休みが始まる」という文の要素を素材として、語順はそのままに載りとして、表出する。主体をめぐる状況と主体の想い（喜び）が一体となる。
（注）

（例6）「ぼくはうなぎだ」（食堂での注文／好きな食べ物

／嫌いな食べ物／魚釣り／学芸会での役割）

（複数の人と話し合っているときに相手から何か訊かれて、簡潔に答えるとき）

意思表示と伝達↓声の調子（音調）、表情、身振り手振り

場に応じて、「ぼくはうなぎが食べたい」「ぼくはうなぎが好きだ」「ぼくはうなぎが嫌いだ」「ぼくはうなぎを釣った」「ぼくはうなぎの役をする」などの文の要素を素材として、語順はそのままに截りとして、表出する。主体をめぐる状況と主体の想いが一体となる。相手から何か訊かれて、簡潔に答える。話し手と聞き手は話題を共有しているの、意味が通じる。食堂で店員（または同席者）から注文（または食べたいもの）を訊かれて、あるいは好きな食べ物、嫌いな食べ物、釣った魚、学芸会での役割について複数の人と話し合っているときに訊かれて、「ぼくは」とほかの人と区別して答える。話の成り行きで、話題のポイントはすでにわかっているから、必要なところだけ截り取って、「だ」でまとめる。女性は「わたしはうなぎよ」「わたしはうなぎね」と、「よ」「ね」でまとめる。

(例7) a 「風が吹くのだ」 b 「風が吹くことだ」(丘の上で)
情緒、意思、感慨など↓声の調子(音調)、表情、身振り手振り

主体をめぐる状況が文で表され、文末の終止連体形に「の」(準体助詞)「こと」(形式名詞)などが接続し、体言化して素材とし、「だ」でまとめる。主体をめぐる状況と主体の想い(情緒、意思、感慨など)が一体化して、表出する。女性は「のよ」「のね」「ことね」と、「よ」「ね」でまとめる。ただし、「ことよ」は女性語とは限らず、やや古めかしい気取った表現となることもある。

(例8)「ちょっと」(路上で／上司に／寄付金依頼に対して／

約束違反に対して／気の進まないデートの申込みに対して)

意思表示と伝達↓様々な声の調子(音調)、表情、身振り手振り、動作、態度

談話表現では、話し手も聞き手も同じ場において、脈絡(前後関係)もわかっているの、省略表現がよく現れる。「ちよつと」は「ちよつと待ってください」「ちよつとお話があります」「ちよつと困ります」「ちよつとひどいと思います」「ちよつと都合がつかなくて行けません」などの下略形である。程度を本義として、呼び止め、呼びかけ、迷惑、抗議、婉曲的な断りなどの表現的意味となる。場の要素と協働して用いられる。

(例9)「雨が降ってきたみたい」(路上で)
様々な意思の暗示↓空を見上げて手を差し出す動作

談話表現では、農耕を主な生計手段としてきた日本人の協調性を重んじる性向という文化的脈絡によって、言い切りによる断定表現を避ける婉曲表現がよく現れる。

「雨が降ってきたみたい」という婉曲表現は、話し手も聞き手も場(気象の変化)はわかっているが、「雨が降ってきた」という断定的な表現を避ける。言外に、「洗濯物を取り込まなくちゃ」「そろそろ話をやめて、お暇します」などの意思を暗示する。

暗示表現は、場に応じて、ユーモア、諧謔、揶揄、皮肉、お世辞、嘘などの表現となる。哲学、宗教、芸術などについての談話表現、

文章表現（哲学的エッセー、詩、小説など）では、比喩表現、精神的象徵表現となる。

（例10）「あとで可愛がつてやるからな」（不良少年達の脅し）

脅迫↓皮肉な声の調子（音調）、笑み（嘲笑、冷笑）、眼差し

抑揚する身振り手振り

言語表示と矛盾する意味を示す。抑揚、皮肉をこめた婉曲表現として、矛盾語法による隠語になる。

逆説表現では、矛盾した表現のように見えながら真実を衝く人生経験の知恵が示される。各個人の生活経験の蓄積という目に見えない場の要素との協働によって成り立つ。「急がば回れ」ということわざには、集合的な生活経験の知恵が示され、共感され理解される。

（例11）「追いかけないんですか」

（喧嘩して恋人に立ち去られようとしている人へのアドバイス）

忠告↓真剣な声の調子（上昇調）、眼差し、身振り手振り

反語表現では、疑問表現の形でありながら、場（脈絡）によって、反転する真意が聞き手（読み手）に丁解される。洞察が求められる前提とされる。「追いかけないんですか」という反語表現には、「あなたは追いかけるべきです」という真意が隠されている。

（例12）a「よろしければ本をお貸し下さいませんか」

b「よろしければ、本をお貸し頂けませんでしょうか」

（学生が教授に本を借りるとき）

依頼↓真剣な声の調子（末尾で上昇調）と眼差し、丁寧なお辞儀

c「一言ご挨拶させて頂けましたら、幸いです」

（団体の会合に取引先の者が予約なしに挨拶を申し出るとき）

依頼↓恐縮した面持ちで、何度もお辞儀をしながら進み出る

待遇表現は、人間関係（身分、階層、長幼、親疎、利害、評価、内外など）の言語的反映である。待遇表現は、場と協働して、待遇の意味となる。待遇は、人間関係における言動による扱いである。

待遇表現（敬語表現）は、場の待遇の要素（微笑み、お辞儀、服装、贈り物など）と相俟って、待遇（聞き手との関係を踏まえた態度）を示す。日本語では、場（状況のなかでの人間関係）の一部が構文に入り込んでいる。間接表現（婉曲表現）によって、聞き手の意思を尊重し、心理的な隔たり（遠慮）を示す。社会的関係における上位者に依頼するときは、言語表現が丁寧になる。敬語（尊敬語または謙譲語プラス丁寧語）表現に、仮定表現、使役表現、授受表現、可能表現、否定疑問表現、推量表現などが付加される。

日本人は、定着農耕という集団の作業（田植え、刈入れなど）を生活形式とする同質社会のなかでの人間関係に気を遣う民族として、待遇表現のうちの敬語表現を発達させてきた。

敬語表現は、人間関係を円滑にするための敬意を示す表現である。基本的には談話語にあらわれる。文章語では丁寧になる傾向がある。内言、独言、日記にはほとんどあらわれない。社会生活に関わる。

三、心象と構文

(例13) a 「お早う」 b 「こんにちは」 c 「ようこそ」

d 「お先に」 e 「お大事に」

人間関係の維持↓やわらかい声(上昇調)、ほほえみ、お辞儀

挨拶表現は、待遇表現、省略表現と関わる類型的な表現である。

日本人は、定着農耕という集団の作業(田植え、刈入れなど)を生
活形式とする同質社会のなかでの人間関係に気を遣う民族として、
声の調子、表情、身振り手振り(会釈、お辞儀)などの場の要素と
協働して、発達させてきた。共同体の維持のための人間関係の円滑
化を主旨とする。農作業は風土(気候、地形)と密接に関わるので、
時候に関する挨拶が多い。

「お早う」「こんにちは」「ようこそ」「お先に」「お大事に」はそれ
ぞれ「お早うございます」「こんにちは天候はどうですか」「ようこそ
いらっしやいました」「お先に失礼します」「お大事になさってくだ
さい」の下略形である。「頂きます」「馳走さま」「おやすみなさ
い」はいずれも歴史的な経緯を含む文化的脈絡に基づいている。

場とことばの協働として、事情(騒音、周開の人達への差し障り、
話し手が咽喉を痛めて話せないときなど)によって、お辞儀(無言)
が「有難うございます」「すみません」「お先に失礼します」などの
挨拶語の代用となる。

心象はそのままことばに表出されて、感嘆(感動・詠嘆)となる。
ひと(主体としての他者)との関わりのなかで、呼びかけや応答と
なる。個物は固有名として示される。

ものごとは雑多な複合体であり、体験(身体経験)による個別的、
具体的なもの集合体である。ものごとの心象は、類別されて概念
となる。本質(基本)的な部分(面、要素)が抽象され、派生(関連)
的な部分(面、要素)が捨象される。概念の種類によってものごと
が区分される。

区分されたものごとの諸関係が、言語という記号の体系によって、
表象される。記号のはたらきが意味を示し、記号の組み合わせかた
が文法となる。心象には、個別的なもの、情感的なものが付随して
いる。レトリックや詩的象徴が用いられるようになる。

概念には、素材概念と関係概念があり、過渡的な準関係概念(素
材的な要素を含む関係概念)がある。素材概念には、基本概念(もの、
こと、さま)と副用概念(副えて用いる派生的な概念)がある。基
本概念を単独で、または組み合わせ用いて、命題(判断形式)を
表すことができる。

言語に表象すれば、ものは名詞、ことは動詞、さまは形容詞・形
容動詞、命題は文である。品詞は、文のなかでの機能を基準として
分類した語彙である。和語「もの」はものごとを空間的にとらえた
概念で、対象(物)、主体(者)、霊的存在(鬼)を示し、和語「こ
と」はものごとを時間的にとらえた概念である。副用概念は、感動

詞、連体詞、副詞、接統詞で示される。関係概念は、助詞で示される。格助詞はものどもの、ものごと、ものと主体の関係を示し、終助詞は事態（ものごと）と主体（自分）の関係（ものごとへの心情）、主体（自分）と主体（他者）の関係（相手や第三者への態度）を示す。準関係概念は、助動詞的連語（「ている」「かもしれない」「にちがいない」など）で示される。関係概念、準関係概念は、助動詞で示される。

小説（梨木香歩『西の魔女が死んだ』）のなかの会話文を引用する。

（例14）「ああ、雨が降っているのね」

（まいの発話「ワイバー」に対するママの発話）

実母の死への動揺↓ワイバーも動かさずに雨の中を運転している

小説（文章）では、発話（会話）とともにある場（脈絡、状況）を読者に（読者の想像力を信頼しながらも）ことは（文章）で示す（叙述する）ことになる。

この発話のなかの「ああ」は半ば独立している。単独でも、文になる。発話者（ママ）の心象は、自他未分の意識で混同心性（主客一体的心象）のレベルにある。気づきという心象はそのままことは表出されて、詠嘆となる。他者（娘のまい）との関わりのなかで、肯定応答となる。

（例14）のなかの「ああ」は、表出文と考えることもできる。

感動詞、連体詞、副詞、接統詞で示される副用概念は、場に応じて、独立した表出文となることが多い。^{（注12）}

以下、前述した作例を構文の観点から再び示す。構文の形式も示す。

（例1）「揺れてる」

〈こと〉文（動詞文）

「関係語（助動詞的連語）」

日本語の枠組の傾向として、述語構文がある。談話では、述べたことを（動詞または形容詞で）述べる。ここでは、動詞文になっている。英語の枠組では、〈主語・述語〉構文を必然とするが、日本語の枠組では、英語の構文におけるような主語を必要としない。

（例2）「いいよ」

〈さま〉文（形容詞文）

「関係語（終助詞）」

日本語の枠組の傾向として、述語構文があり、ここでは、形容詞文になっている。

（例3）「海だ」

〈もの〉文（名詞文）

「関係語（助動詞）」

（截りとり文）

素材語・関係語（助動詞または終助詞）

日本語の枠組の傾向として、素材を分析しないままに表出したり、「だ」「よ」「ね」などで想いを凝縮させたりする表現があり、ここでは名詞文になっている。状況を構成する（焦点となる）素材を載りとって「だ」「よ」「ね」などで想いを凝縮させる載りとり文と考えてもよい。

（例4）「まだだ」

（載りとり文）

素材語・関係語（助動詞または終助詞）

（修飾語）

日本語の枠組の傾向として、素材を分析しないままに表出して、「だ」（女性）は「よ」「ね」で想いを凝縮させる表現がある。話し手と聞き手は同じ場において、脈絡（前後関係）がわかっているから、素材がそのまま素材を含む関連情報となる。状況を構成する（焦点となる）素材を載りとって、「だ」「よ」「ね」などで想いを凝縮させる載りとり文とする。

（例5）「明日から夏休みだ」

（載りとり文）

素材語・素材語・関係語（助動詞または終助詞）

（修飾語）

状況を構成する幾つかの素材を語順のままに載りとって、「だ」「よ」「ね」などで想いを凝縮させる載りとり文とする。

（例6）「ぼくはうなぎだ」

（載りとり文）

素材語・素材語・関係語（助動詞または終助詞）

（補語）

（題目語・関係語）

状況を構成する幾つかの素材を語順のままに載りとって、「だ」「よ」「ね」などで想いを凝縮させる載りとり文とする。「ぼくは」は英語の構文におけるような主語ではない。「うなぎだ」という載りとり文を前提にすれば、「ぼくは」は補語である。場のなかで、複数の人と話し合っているときに相手から何か訊かれて、「ぼくは」とほかの人と区別して簡潔に答えるから、「ぼく」は題目語である。「は」は場のなかで題目を提示し、対比（区別）のはたらしめをしながら、以下で説明的に（焦点となる）素材を示している。

（例7）a 「風が吹くのだ」 b 「風が吹くことだ」

（載りとり文）

素材文・媒介語（準体助詞または形式名詞）

・ 関係語（助動詞または終助詞）

状況を表す素材文を語順のままに載りとって、「の」「こと」などで体言化して、「だ」「よ」「ね」などで想いを凝縮させる載りとり文とする。

(例8)「ちよっと」

(省略文)

副用語 (副詞)

副用概念は、場に応じて、以下の文が省略される(下略される)ことによって、独立した表出文に近づく。独立的に用いられて、呼びかけや詠嘆などの意味を示し、感動詞のはたらきをする。

(例13)の挨拶語も、以下の文が省略される(下略される)ことによって、独立した表出文に近づく。独立的に用いられて、呼びかけなどの意味を示し、感動詞のはたらきをする。

以下、実例(場々時、所、発話者)および構文を示す。

(例15)「帽子、忘れちゃいけんよ」

(二〇一六、二三(水)午前九時頃)

(JR吉備線列車内、下車する時、六〇代女性→六〇代男性)

補語・動詞文

(題目語) 「関係語(助動詞的連語・終助詞)

「帽子」が話題のポイント(題目)になっている。聞き手に注意を促している。話し手がころのなかの「帽子」の心象を伝え、聞き手のころのなかに「帽子」の心象を再現(再構成)させている。「よ」は親密な人間関係での思いやり、忠告を示す。

(例16)「ちよっと遠いんだよ。それで、かなり手が動いちゃう」

(二〇一六、九、二〇(火)夕刻)

(岡山理科大学玄関前、二人の男子学生)

修飾語」

形容詞文

・接続語・補語・動詞文

「関係語

「関係語

話し手と聞き手には、脈絡(前後関係)がわかつているが、第三者には話題が(実験のことか、アルバイトのことか、ゲームのことか)わからない。「よ」は親密な人間関係での報告を示す。

(例17) a 「木目がすごいな」

b 「大きいでえ」

(二〇一六、三、五(土)午後

(岡山県総社市中央公民館、鳥城彫展示場で、二人の初老女性)

a 補語・形容詞文(感動、評価)

「関係語(終助詞)

b 形容詞文(程度)

「関係語(終助詞)

「な」は親密な人間関係での率直な感動を示す。「でえ」「ぞ」(共通語)に相当する方言で、親密な人間関係での強めを示す。

(例18) a 「おもしろえわあ、この松の木が。動きが楽しいが」

b 「梅じゃが」 (二〇一六、三、五(土)午後)

(岡山県総社市中央公民館、鳥城彫展示場で、二人の初老女性)

a 形容詞文 補語 補語・形容詞文

「関係語」 「倒置」 「関係語」

b 名詞文

「関係語(助動詞・終助詞)」

(截りとり文)

素材語・関係語(助動詞・終助詞)

「わあ」は親密な人間関係での題目についての感動を示す。「が」終助詞)は方言で、親密な人間関係での問いかける気持ちでの同意の求め、念押しを示す。

以下、前述した作例を構文の観点から再び示す。

(例9) 「雨が降ってきたみたい」

(例10) 「あとで可愛がつてやるからな」

(例11) 「追いかけないんですか」

いずれも、(論理脈絡をつくる構文の形式から成る)言語の枠組と(心理的脈絡をつくる)心象の枠組とが一致しない。場を含む文法のうち、言語の枠組(論理脈絡)に象徴(暗示、修辞、詩的象徴)体系が加わる。

(例12) a 「よろしければ本をお貸し下さいませんか」

b 「よろしければ、本をお貸し頂けませんでしょうか」

c 「一言ご挨拶させて頂きましたら、幸いです」

場を含む文法のうち、言語の枠組(論理脈絡)に象徴(暗示、修辞、詩的象徴)体系と待遇体系(敬語体系)が加わる。待遇体系(敬語体系)は、言語の枠組(論理脈絡)の構成要素(意義素)に待遇を示す接辞(接頭辞、接尾辞)または修飾成分が前後から付加する複統合的な構造を示す。さらに、仮定表現、使役表現、授受表現、可能表現、否定疑問表現、推量表現などが複合的に付加される。待遇度(敬意)を高めるために、間接表現(婉曲表現)を指すから、表現形式は過剰となる。

四、心象から表現へ

外界と内面(こころの世界)について、簡略に図示する。(◎は外界のなかの焦点、●は心象世界のなかの焦点、□は言語記号、■は題目、◆は他者のおもいである。)

外界→視界（視野）、聴界、嗅界、触界、味界……
ものごと いきもの

○○○対象
●●●焦点
表情（身振り手振り、動作）
おもしろい

視線→

視点<（↓目蓋を閉じる→残像）

からだ」感覚

……ころ」→印象

↓知覚→認知

内的視点

内的視線→（このころのまなざし）

○●●心象→■●●題目（↓自分）

おもしろい（直感／欲動→情動）→感嘆

記憶のなかのものごと（ひと）

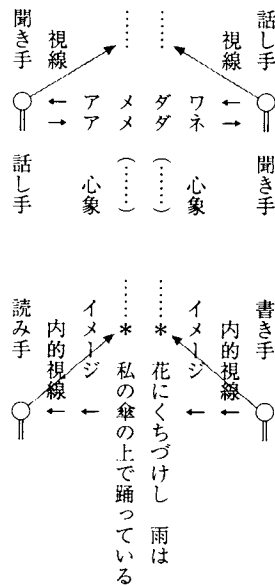
想像のなかのものごと（ひと）→心像

夢のなかのものごと（ひと）→イメージ

内面（このころの世界、心象世界）

外界のものごと（目蓋を閉じた直後の残像は、視知覚神経回路の前半のショートカット（時差による作業記憶）である。残像（作業記憶）の集積が長期記憶、想像、夢のなかのものごと（ひと）という心像（内的イメージ）の材料となるのではないか。

意味のやりとりについて、談話から文章への移行について、詩（ローゼ・アウスレンダー『雨の中で』加藤文雄訳詩集『雨の言葉』）を例に考えてみる



談話では、話し手と聞き手が外界の同じ対象（雨）に視線を向けることで三項関係が成立し、関心を共有するという相互意思伝達の基礎（前提）ができています。話し手（女性）が「雨だわ」という切りとり文（素材語・関係語（助動詞・終助詞）または「もの」文（名詞文・関係語（助動詞・終助詞））を聞き手に伝えるともなく（独り言のように）表出する。「雨」は日本語の枠組では「もの」だが、示される意味は「こと」である。「わ」は「雨」を題目として示す。聞き手（男性）は話し手（男性）に役割を交替して、「雨だね」という切りとり文（素材語・関係語（助動詞・終助詞）または「もの」文（名詞文・関係語（助動詞・終助詞））で（相槌をうつように）答える。

「ね」は共感（同意）を示す。聞き手（女性）への同調的な働きかけが強い。「わ」も「ね」も（待遇辞「です」ではなく）「だ」に後接しているから、話し手と聞き手とは親密で遠慮のない間柄（心理的関係）にあることがわかる。文章（詩）では、書き手（女性）と読み手（不特定多数）は心象世界の同じ対象（雨）に内的視線を向けることで三項関係が成立し、関心を共有するという相互意思伝達の基礎（前提）ができています。書き手（訳者）は、ドイツ語（日本語）の枠組に基づいて、（主語・述語）構文（もの・こと）文で論理脈絡をつくるが、さらに象徴体系としての比喩体系に基づいて、喩える方法の分類では暗喩法（隠喩法）、喩えるものの分類では擬人法を用いている。読み手は言語表示における論理脈絡だけでなく場想像力による場面的脈絡、言語文化としての比喩体系という文化的脈絡の脈絡によって、意味をよみとる。書き手と読み手が役割を交替することはなく、一方向的な意思伝達となる。無意識的なこころの世界では、普遍観念によって、相互意思伝達がなされる。

談話では場（脈絡、状況）の関与が大きいが、文章では場もまたことばで表現しなければならない。家族と一緒にいて食堂で注文するという場面で、男の子が「ぼく、エビフライ」と発話すれば、意味が了解される。作例を示す。

（例19）「ぼく、エビフライ」（食堂での注文）

文章（小説）では場（心理的脈絡、場面的脈絡）を読み手（不特定多数）に伝えるために多くのことばを費している。葛西善藏

（一九一七）『子をつれて』の一節を引用する。

…家を締切つて八時近くに彼等は家を出た。…尋常二年生の彼の長男は書籍や学校道具を入れた鞆を肩へかけて袴を穿いてゐた。幾日も放つたからかしてあつた七つになる長女の髪をい、加減に束ねてやつて、彼は手をひいて、三人は夜の賑やかな人通りの繁しい街の方へと歩いて行つた。彼はひどく疲労を感じてゐた。そしてまだ晩飯を済ましてなかつたので、三人ともひどく空腹であつた。

で、彼等は、電車の停留場近くのバーへ入つた。子供等には寿司をあてがひ、彼は酒を飲んだ。酒のほかに、今の彼に元気を附けて呉れる何物もないやうな気がされた。…無意味な深い溜息ばかりが出て来るやうな気がされてゐた。

「お父さん、僕エビフライ喰べようかな」

寿司を平らげてしまつた長男は、自分で読んでは、斯う並んでゐる彼に云つた。

（例20）「お父さん、僕エビフライ喰べようかな」

（例19）は、（例6）と同じく載りとり文であるが、（素材語（補語、題目語）、素材語）という構文の形式になっていて、関係語がない（体言止めになっている）。

（例20）では、場（心理的脈絡、場面的脈絡）を自分なりに理解している話し手（尋常2年生の彼の長男）が、遠慮深く意思を聞き

手（「彼」）に伝える。構文の形式を示す。

〈呼びかけ語〉・〈題目語・補語（対象語）・行為語（動詞）

・関係語（助動詞・終助詞・終助詞）〉

呼びかけ語は半独立的である。呼びかけ語には、待遇体系が加わって、〈待遇（敬語）接頭辞・意義素語根・待遇（敬語）接尾辞〉という複統合（抱合）的構造になっている。題目語（「僕」）は助詞なしで示されている。関係語は「ようかな」という連語で、相手に問いかけるようなやわらかい（婉曲的な、遠慮深い）意志の率直な伝達が表示されている。父親の苦境を承知しながらも、甘えを含んだ（許可願いの）発話になっている。

おわりに

心象と場、構文という観点から、談話にみる心象表現を中心に考察した。文章にみる心象表現については、別稿に譲りたい。

（注1）拙著（二〇一三）参照。

（注2）「混同心性」「複合」はヴィゴツキー（一九三四）の用語である。

（注3）拙論（一九九六）参照。

（注4）拙論（一九九三）参照。

（注5）奥津敬一郎（一九七八）参照。

（注6）拙論（一九九七）参照。

（注7）菊地康人（一九九四）参照。

（注8）神話に基づいて、農耕儀礼を精神的に主導した古代の天皇制とも関わる。

（注9）「頂きます」には古代の稲魂信仰、「馳走」には中世のもてなしが窺われる。「やすむ」は古代の忌詞に由来する。

（注10）サビア（一九二二）参照。

（注11）助動詞は千年前をピークに衰えつつある。たとえば、古語「べし」は、現代語では「なければならぬ」「にちがいない」などの助動詞的連語に交替する。

（注12）たとえば、副詞「ちよっと」は以下の文が省略されて、談話語では呼びかけ（呼び止め）の独立した表出文として用いられる（感動詞の機能に近づく）。

（注13）津田一郎（二〇一五）は、神経系で「何かがある」と感知するまで0.3秒、「何かは何である」と認知するまで0.3秒かかると述べる。

（注14）岡本夏木（一九八二）参照。

参考文献

1 拙著（二〇一三）『日本語心象意味論』おうふう

2 ヴィゴツキー（一九三四）『思考と言語』柴田義松訳（二〇〇一）

新読書社

3 拙論（一九九六）「コンテキストの構造と分類」金沢大学国語国文21

- 4 拙論（一九九三）「連用修飾語を承ける（体言プラス「だ」の文の構造）多々良鎮男傘寿記念論文集
- 5 奥津敬一郎（一九七八）『ボクハウナギダ』の文法』くろしお出版
- 6 拙論（一九九七）「だ」で終る日本語の表現」表現研究65
- 7 菊地康人（一九九四）『敬語』角川書店（一九九七）講談社学術文庫
- 8 サビア（一九二二）『言語』泉井久之助訳（一九五七）紀伊國屋書店
- 9 津田一郎（二〇一五）『心はすべて数学である』文藝春秋
- 10 岡本夏木（一九八二）『子どもとことば』岩波新書